

第14回銀華文学賞発表

銀華文学賞

第一四回銀華文学賞は、日本全国から、昨年より七〇篇以上多い二六七篇の御応募をいただきました。まことにありがとございました。おかげさまで今年はさらに多彩な内容となり、受賞数も増え、豊かな結果となりました。予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに結果を発表させていただきます。

作品は、誌面の都合により、今号は最優秀賞と優秀賞のみ掲載させていただきますが、奨励賞など秀でた作品は次号以降に順次掲載の予定です。

申し訳ございませんが、コロナウィルスの影響が尾をひいた事情から、授賞式・祝賀会は今年度も見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、御了承ください。

なお銀華文学賞は明年も年齢を四十歳以上に繰り下げさせていただきます、枚数、締切、審査料など他はすべて同じに募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

最優秀賞

「隻眼の熊」

塩崎憲治

(山形県米沢市)

「闘牛の絆」

勢 隆二

(大阪府柏原市)

優秀賞

「目撃者」

長野正毅

(東京都杉並区)

「ウイルスと木偶廻し」

菊野 啓

(徳島県徳島市)

「無低の住人と少女」

神郷愛光

(和歌山県和歌山市)

「災禍の向こう」

小柳義則

(佐賀県小城市)

「エニシング・ゴーズ」

室町 眞

(東京都杉並区)

奨励賞

「遙かな海」

平安名尚

(三重県名張市)

「入学記念写真」

寺村健三

(福岡県北九州市)

「たましずめ」

荒井りゆうし

(東京都練馬区)

「三月十九日」

小倉孝夫

(富山県黒部市)

「夫婦力」

星野 透

(埼玉県所沢市)

「D&Sの功罪」

高橋惟文

(山形県山形市)

「一時帰宅」

ほり 啓

(高知県高知市)

「共生花」

幸祉豆杵

(愛知県名古屋)

「ミルクレデイ」

佐藤 勉

(京都府京都市)

「ヒバカリ」

山田 明

(千葉県流山市)

「残照」

梶川洋一郎

(広島県広島市)

佳作

- | | | | |
|---------------|-------|-------------|-------|
| 「切っさし」 | 中村正弘 | 「ある再会」 | 野原めぐみ |
| 「波の音」 | 七里彰人 | 「流砂」 | 深見恵美子 |
| 「ベランダにて」 | 山本桂子 | 「神無弥」 | 飛葉哲朗 |
| 「夏美の家」 | 黒崎つぐみ | 「そこに吹く風」 | 畑田 |
| 「silent love」 | 賀来ふゆ子 | 「あじさい」 | 工藤阿大 |
| 「海上都市」 | 純子 | 「無言歌集」 | 辻陽子 |
| 「戦争孤児」 | 満洲旅人 | 「学生街で」 | 山崎ゆのひ |
| 「美女峠」 | 目黒広一 | 「夜泣く子」 | 吉田圭 |
| 「槿花の夢」 | 大和川義之 | 「朝のパズル」 | 杉木節 |
| 「ゲリマンダーの写真帳」 | 守尾六 | 「星ノ逢フ夜」 | 平ゆりか |
| 「海まで走る」 | 高山恵利子 | 「破調」 | 野沢薫子 |
| 「千寿苑」 | 西山慶尚 | 「ラバーダック」 | 半崎輝 |
| 「佳日和」 | 折口真 | 「光の射す方へ」 | 赤井晋一 |
| 「僕の彼女」 | 村重知幸 | 「ゑいじよろうしゅう」 | 櫻間静 |

選評

ベテランが飛躍

五十嵐 勉



今回の銀華文学賞は、ベテランが飛躍の輝きを見せたことに尽きる。およそ最優秀賞は、奨励賞や優秀賞をいくら重ねても、それだけでは届かず、プラスチックアルファの跳躍がないと達しないものである。当選の勢隆二氏は七十九歳、同じく塩崎憲治氏は七十二歳——古稀を超えても作品の質に飛躍前進があることは、実に喜ばしく、年齢を超えてなお技量も精神の骨格もアップするものであることを示して、感に堪えない。銀華文学賞の意義を体現するものである。

奇しくもどちらも動物を主軸にしている、人間の生活に近接した生き物を主人公にしている。その息遣いや血の滾りが届いてくるダイナミックな作品になっている。

河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は二〇一五年より、銀華文学賞からまほろば賞の中に移され、同人雑誌掲載の小説作品を対象にし、まほろば賞選考会において同時に選考され、決定されることとなりました。

受賞者には賞状、賞品、賞金五万円がまほろば賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



勢隆二氏の「闘牛の絆」は奄美群島の徳之島の伝統闘牛に生きる家族を描いて、営々と伝わる血の躍動を喚起する。飼い主の期待を背負って牛が全身全霊で押す闘牛シーンは思わず手に汗を握る迫真力がある。これは作っただけでは書けない、実際にそのシーンに立ち会った者の筆によるリアルティである。牛の筋肉が隆々と動き、鼻息が熱く聞こえてくる生々しさを有している。また、現代の様々な事情を乗り越えてそれに情熱を傾ける人々の純朴ゆえに力強い一途さがいい。我々が現代生活で忘れていた原初の動物との交感が息づいている。読み終わって、闘いに生きる牛の存在感と、それに縋り、生活を賭して燃やす情熱の純粹さが、単純な命の尊厳を見せてくれる。徳之島の風土も生きている。よくその伝統行事をこういう形で結晶させた。その努力と、粘り強さを称賛したい。

もう一つの当選作塩崎憲治氏の「隻眼の熊」は特異な題材に、すばらしいストーリーを組み合わせて、感動的な作品に仕上げた。本流に入って行くまで少し遠回りになっているが、子熊が出て来てからは、悲劇のクライマックスへと一気に翔け昇っていく。動物どうしの生きる愛情の交感、人間社会と動物の乖離の割れ目で殺し殺されるものに分かれる宿命が、あまりに切ないラストの激突へ追い立てる。最後は庇い合うように、あたかも心中するように、二つの体が谷底へ落ちていくシーンは劇的である。そして同

霧散し、また別のものへと変化する」という文章などはドキリとする掘削である。また「つらいことも気に食わんこともあつたけれど、いつもそばにいた人たちとのあいだには、良かれ悪しかれ歴史が生まれる。膨大な記憶で構成されたそれを頼りにウメコは今を生きている」という部分なども、普段から考察を深めていないと出てこない秀でた文章だろう。マスクとシールドを付けた正月の「木偶廻し」で最後を締めたのは秀逸で、これも洗練された腕を示している。ただ、終わり部分で現実の表象の言葉を並べた箇所は過多によって羅列になってしまっているため、点を減じ、修正をお願いした。勇み足も目についたところがあるが、総じて高い技量を確認した。

長野正毅氏の「目撃者」は高校時代の親友の特異な存在を浮かび上がらせた尖鋭な小説である。確かに老年になって初めて遠い過去が鮮明になり、新たな意味を有して再現されてくることがある。むしろ深まりを得るがゆえにより鮮烈さを増す。この作品はそういう面における積極的な回顧であり、文学の可能性の一端を示している。母子家庭の孤独な主人公に、受験校のクラスでやはり孤独な一人が近づいてくる。母親の再婚相手が医者で、裕福な生活を保証されている。食堂でもついで食事をするその贅沢な暮らしに触れながら、しだいにその屈折した世界の深みに入っていく。常識的な社会への反抗の牙がさらに変異して、学校

時にここに人間社会と獣の敵対の矛盾を超えて、動物どうしの深い愛情が昇華されて胸に鮮やかに残る。愛によって生きることでできたそれが、動物の魂として宙へ昇る。それが胸に感動として湧き起こってくる。よくこれを結晶させた。また一度死に絶えたと思った愛犬が再び戻ってきてそこでまた息を引き取る姿も、人との繋がりの中で生きるものの愛しさを伝えて、胸に迫る。現今の機械や制度の便利さに真の重要なものを忘れがちになっている我々に、あらためて原初的な尊いものを突き付けてくる感動作を成立させた。拍手を送りたい。

優秀賞は長年筆を研いだ技量のある書き手が並んだ。題材は高校時代から老年までバラエティに富み、熟年、老年の真の豊かさを示している。菊野啓氏の「ウィルスと木偶廻し」は方言をリズムよく交えた流れのよいモノローグ的文体で、現代のコロナ禍をうまく交えて、独特な世界を作り上げている。むしろ現代の流行としてのコロナ騒ぎを、冷静にシニカルに見つめて、昔からのよそ者を隔離する閉鎖的慣習と比べて、現実の世界の浮薄性に切り込んでいくところに鋭さがある。老年の意識に沿って過去の厚い堆積から意義深い洞察を紡ぎ出す技量が高い。「人は自分の死を影絵のように引きずりながら歩いていく。やがて足が一步も前へ進まなくなり、背後から黒い影に覆い被ざられて影そのものになる。影は不可視の微粒子となって空気中に

の英語女性教師とラブホテルに入るまでになったその現場を、主人公が目撃するところで、小説は終わっている。成長と社会との間の亀裂の断面を見せてくれる鋭利が際立った。

神郷愛光氏の「無低の住人と少女」は、生活保護よりもっと深刻な世界の存在を示してくれている点で、異色であり、そこに生きる人々の生態をつぶさに描く筆致は手堅く、重なりアリティを醸し出している。経験に近いものがないとこれだけ書けないだろう。死んだ同僚の愛児を見守る展開はおもしろく、童話を聞かせるストーリーが救いになっていく結末は明るく希望に繋がっている。最後の部分は修正によって改良されたが、少しのアドバイスで花開く力量を持つている。さらに大きな題材に挑戦してもらいたい。

「災禍の向こう」(小柳義則)と「エニシング・ゴーズ」(室町眞)の評は他の選考委員に譲る。

奨励賞も充実していて、復帰の書き手にもいい作品が目立った。星野透氏の「夫婦力」も熟年離婚になるうとする夫婦が最後に二人の住んでいた地を訪れてかろうじて別れを踏みとどまるストーリー展開に、地味だがよく煮込まれていて、不思議な読後の妙味が残る。復活を喜びたい。高橋惟文氏の「D&Sの功罪」も氏らしい温かみが匂い立つ作品で、久々に人肌の柔らかな機微に触れた気がした。ただ、「D&S」という言葉がやや抽象的で定着性が弱い分、

イメージの結びが弱く、主題を反映しにくくなっているのが惜しまれた。

佐藤勉氏の「ミルクレディ」は、複数の人といっしょに食事できない食恐怖症の恋人を更生させる話である。題材が変わっていて、こんな病気もあるのかという興味につられて引き込まれていく。その過程で、愛情を貫く姿勢が好感を呼ぶ。読み終わってみればシンプルな恋愛譚ではあるが、魅力のある作品となっている。この作品は佳作の「僕の彼女」(村重知幸)と「silent love」(賀来ふゆこ)と並んで、今回の三つの純愛好小説とも言える。「僕の彼女」は死んでもなお愛が伝わることを主軸に、また「silent love」は、遠くでただ見えるだけの関係が実際の恋愛に繋がっていく伝播を主軸に流れていく。どれも素朴ではあるが、ひき合うものの姿を描いて、胸に快く残る。

「ヒバカリ」(山田明)は愛人に生活を支えてもらっていた画家の父親の死をめぐって、複雑な家族の思いを描きながら、最後にやはりはかなく死んでいく副主人公の娘の宿命を不思議な味わいで浮かび上がらせた。その手腕の高さは目を引くが、タイトルの「ヒバカリ」の蛇からの由来がやや唐突で、しつくりこない恨みがある。趣の深さは修練を窺わせる。

梶川洋一郎氏の「残照」は、なかなか嫁がない娘と暮らす、はかなさの漂う晩年の生活を手堅く描いて、そこはかあつたのだろう。優れている。

当選作勢隆二氏の「闘牛の絆」は、一トンの牛同士の間牛のシーンが圧巻である。この場面だけでも、当選に値する。この迫力は、想像では書けないもので、おそらく身近にあったのだろう。優れている。

当選作塩崎憲治氏の「隻眼の熊」も、犬と熊の話で銀華文学賞では、珍しい題材である。前にも魚の話を書かれていたと思われるが、興味が向く方に創作されているのは良いと思う。犬とヒグマの話となると昔読んだ「牙王」という漫画を思い出す。戸川幸夫の原作で、石川球太の絵で、動物への愛情が感じられる作品である。塩崎氏も今後、動物を絡めた作品を期待したい。

優秀作室町眞氏の「エニシング・ゴーズ」は、彼の二系前にある作品群の一つで、自分が育った時代を描いている。線から書く等室町氏らしさは出ていると思う。この作品は、確かに男が書くとするれば無理があり、モデルがあるのかと思うが、自分や友人の経験と時代の雰囲気を描いている。ただ、興味を引かれるのが、時代のカオスと、アナキーの時間から、人々が、家庭や普通の生活に戻るのが新しい。残念ながら無茶苦茶でも自由な時代は長く続かない。父や、家や、生活に押しつぶされる自分がある。到着点はまだ、見えない。室町さん、もう少し頑張ってください。

優秀作菊野啓氏の「ウィルスと木偶廻し」は問題作であ

とない微妙な味を醸している。「命の浮かび」が感じられる引き合う父娘と、離れなければならぬ宿命とが死んだ妻を合間にして揺れている流れがいい哀切を織っている。

「三月十九日」(小倉孝夫)は、息子の癌の最期を伝えて、生々しい実写小説となっている。医師で人工肛門を嫌う息子が、口腔癌から大腸に転移しても民間療法で治そうとするものの、結果的に悪い方向へ行き、治療に行った東京でそのまま最期を迎えるまでを克明に描いている。最後がやや描写が足りないながら、緊迫感を帯びた進行は、読ませた。全体に充実した今回の銀華文学賞であり、熟年の豊かな体験がそのまま作品の豊饒となっている。次回もそれぞれの多様な経験世界の掘り起こしを期待したい。

動物もの二作

大高雅博



今回は、前年の新人賞に刺激されたためか、力作が揃ったようだ。

当選の二作は、動物もので、動物が良く描けた作品は少々点が甘くなるように思うが。

コロナ禍、東京から徳島に戻ってきたメグミに「何故、帰ってきたのか」という悪意のある張り紙が出る。祖母のウメコは、弟となる養子のヒデオとその父のことを思い出す。ヒデオの父は、恐らくハンセン氏病で、その頃は特効薬も無く、弱い伝染力しかないことも知られておらず、差別の対象となっていた。四国の巡礼には、そのような病を持った人々が歩く特別の道があったという。「訳ありの巡礼だけが人目を忍んで往き来する、遍路転がしとも呼ばれる裏の参道」から出てきた親子を、ウメコの父親は、畜舎の小屋でかくまうが、近所で噂になり、いじめられ、村八分となる。ヒデオの父は一人裏の参道を進み消えてしまう。時代が変わっても差別はある。同じ事の繰り返しであり、外国人に対する新しい差別も生まれている。正月の「三番廻し」という芸能も、マスクとフェイスマスクをしながらである。それでもウメコは「見られたら十分だ」と言う。

優秀作小柳義則氏の「災禍の向こう」は現代の状況を背景としている。九州の作り酒屋で川の氾濫で、浸水被害があり、致命的な被害を受ける。親友の助けもあり、再建しかけたときにコロナ禍に合う。何とか酒造を続ける決意をしたときに、助けられていた居酒屋を経営する親友が客にコロナ患者が発生したことに困り、うまくいかななくなり自殺する。やりきれない話であるが、ありそうなことであり、現実にはすでに起こっていると思わせる作品である。

神郷愛光氏の「無低の住人と少女」も今日的な内容を持っている。この世には貧困ビジネスと称するものがあり、生活保護費を預かり、少しの小遣いを渡すだけで、小さな部屋に縛ってしまう。この作品に出てくる無低（無料低額宿泊所）は、人生を諦めざるをえない人々が暮らしている。主人公は、そこに入っている男から、近くの養護施設にいる娘の話聞き、託される。男は死に、主人公は、その娘に会いに行き、希望を見いだす。なかなかの作品だと思う。

今回の応募作で気になったのは、息子さんと、娘さんが亡くなることで発生する話が幾つかあったことだ。自分の子供が亡くなることは耐えられないと思う。小説になった場合、それが事実であることもあり、軽々には評価出来ないが、小説である以上、悲しみだけではいけないと思う。客観視する必要がある。

奨励賞小倉孝夫氏の「三月十九日」も息子の死を扱っている。普通と違うのは、父も息子も医師などの医療関係者であるということだ。人工肛門を嫌がった息子が民間療法に走り、そして亡くなる。父としてまたは医者として、無念だったと思われる。その気持ち「三月十九日」という題名に現れている。悲しい作品であるが、伝えたかった気持ちは理解できる。

他にも奨励賞には、常連の高橋惟文氏「D&Sの功罪」等、興味深く読ませていただいたが、詳細は他の選者にお任せして、実は、今回は佳作、入選の中にも良いと思われる作品があり、それに触れたい。

黒崎つぐみ氏の「夏美の家」である。九州の山間部の集落に、母親と暮らす夏美は、余り恵まれた環境にあるとは言えず、友人もいない。無人の稲荷神社が「夏美の家」だった。あるとき、大水がでたあと、神社に行くと、段ボールが積んであって、その中にリリアンがあり、それを学校で遊んでいると、女子が見つけ、それが縁で友達が出来ていく。段ボールは不法投棄で、犯人がわかり、荷物は取り除かれるが、夏美の家は残り、そこで友人と遊ぶ。確かに、衝撃的な話ではなく、地味な内容であるが、後味が良く小説らしい小説だと思いい好ましく思った。

伊和七種氏の「ふわりと浮かんでどかんと入ってきた」喉頭癌の男が、生と死の世界を彷徨うというような怪談でもあり、荒唐無稽な話である。実はこの作品を読んだとき安部公房の最後の長編小説「カンガルーノート」を思い出した。主人公の死出の旅路を公房調の想像力にあふれた作品である。それを考えていると、この作品は、ちょっと、宗教色が強すぎるのかもしれないと思うようになった。最初に現れる新興宗教は単に古い師くらいでよいのかもしれない。神社はすでに異界で、鳥居も異形のものの方がわかりやすくなる。神は異界の鬼で、少年の形をしている鬼には、角のようなものが生えていてもよい。最後は、少年は、

入選

最終選考に残るのは、すでにかなりの評価なので、それ

だけで誇ってもよいと思う。

今年も良い小説に巡り会えた感じがする。しかし、満足せずにもう一步先に進んで下さい。



- 「蟹め牡蠣」 宮川行志
「牙子のメス」 高尾周一
「異邦のひと」 大島直次
「私には帰る家がない」 白河葉
「住むということ、生きるということ。」 こんどうよしひで
「ふわりと浮かんでどかんと入ってきた」 伊和七種
「さいなら」 八月朔日壬午
「天国ばかり地獄ばかり」 石川 侃
「つひのすみか」 君津佳孝
「琴線」 友 修二
「演歌の港」 朝川あきら

- 「死期」 寺田秀穂
「プログラム」 深井健二
「薫風」 根岸幸晏
「父の軍隊手帳」 笠置英昭
「雷鳴」 藤川とみ枝
「高野聖の謎」 有汐明生
「進路変更」 荒圃窮策
「柔らかな手」 益田和則
「ドッグパドル」 大谷 努
「かげろふ」 伊吹燿子
「十二月十四日」 悠希マイコ
「スタートライン」 小岩井友理

印象に残った作品

小浜清志



当選作となった「闘牛の絆」と「隻眼の熊」は共に動物を扱った作品でこの二作とも筆力が圧倒的な勢いをそなえている。当選おめでとうございませう。

さて、当選には至らなかったものの印象に残った作品を紹介したい。

まず初めに「三月十九日」である。直腸ガンに冒された息子の義孝を巡る家族間の話である。歯科医師である中倉の息子も娘と共に同業であるから医学には精通している。したがって手術をすれば完治できる病であるが、肛門に近いため手術をすれば必ず人工肛門になるといふ。義孝はそれを絶対に嫌だと言いつつ手術を拒否し、民間療法を選択することになる。中倉は義孝が読んだ民間療法に関する数冊の本に眼を通したが、どれも経験の積み重ねに過ぎず、科学的根拠があまりにも少ないことが難点といえた。だが義孝はいろいろな民間療法を試みた結果、プラズマ療法に行きついた。直接体にも照射すると癌細胞が死滅したとの報道

をひたすら話す中田桃子の真意をわかることもなく別れるのだが、バカ真面目な態度しかとれなかった自分を反省する。この小説は実際にあったことであるかもしれないが、書く前にもっと構成をしつかり練るべきであろう。再会の内容も事実を描くのではなく、作品の形になるように工夫すべきだった。

「星ノ逢フ夜」康祐と司の幼い頃からのつながりが変化していく作品で、青春のあわい心情を映し出している。美沙子の出現で二人の関係は揺れだし司がバイクの事故死を遂げると。五年ぶりに康祐は司の故郷に出掛け司の死の真相をつきとめる。事故当日の夜、司が美沙子を訪ね「好きな人いるかと」聞かれ「私はいる」と答える。すると司は「ごめんな、美沙子ちゃん、おれ、悪いことしたからさ、美沙子ちゃんの好きなやつ連れてくる」と言い残してヘルメットをかぶって出掛け事故に遭って死んだ。そして、事故現場を見に来た康祐と、花をたむけにきた美沙子は出会う。それはあたかも司が導いてくれたような再会であった。

「夫婦力」夫婦の亀裂が別居までに広がっていったある日、二人してかつて生活をしてきた場所を巡ることになる。新築アパートでの思い出が甦る。次に移り住んだのが同じ市内の公団住宅でそこに訪れても思い出はあふれてくるが、よりを戻したいとはまったく思わない。そしてかつての住人と何十年ぶりに会い少しづつ気持ちが揺れてい

があったという。そして、義孝はプラズマを照射するため富山から東京に通いだした。意外なことに施術を受けた日から数日は体調も良く、普段と変わりなく中倉と一緒に患者を診たりしていた。それが、十日位が限度で度々上京するようになった。十二月十六日まとめて施術を受けるというところで義孝が東京に向かう。クリスマスまでには帰るといふ予定であったが、十二月二十六日の夕方に東京の病院から電話があり、義孝が救急車で運ばれ緊急の手術を受けたと告げられた。そこから事態は急変して結末を迎えるのであるが、作者の深い悲しみがずっしりと沁みこんでくる。もう少し掘り下げればもっと上位に行けた作品だった。

「あじさい」この作品も子供の死を描いている。十七才の娘を失った父親の心情が痛いほどに伝わってくる。交通事故故当日の病院での出来事などが深い悲しみをたずさえて淡々と描かれている。葬儀会場に現れた加害者の両親を巡る周りの反応なども痛々しい。加害者に対する父親の気持ちをもっと書いていけばもっと深みが増しただろう。

「ある再会」教師をしていた鍋木育子の元にかつての教え子だったという中田桃子が会いたいとの連絡をくれる。老人ホームで暮らしている鍋木育子は心よく会うことにする。しかし、遠い昔の記憶にもない話を中田桃子は次々と喋るのだが鍋木はまったく思いつかない。教師であった鍋木に詫言をもとめるのではなく、小さな叱責のあったこと

き、やがて一緒に生きて行く道を選ぶのであるが、亀裂のなり行きが不自然すぎるのが気になった。

多彩な題材と手応え

八覚正大



夏の猛暑酷暑、そして急に気温が落ちたりまた上がったたり……朝晩だけでも十度以上の温度差があったり、秋になって体調を崩された方が多いのではと。くれぐれ

命を大切に、自宅での待機……といくら言われても、家の中に居れば安全安心かと言うと、実はそうでもなく、人間は外界と内界のバランスを取って生きている実存。

したがって、内界ばかりで安全なら、悪夢を見たり代謝を損なう故の病気にはならないはず——しかし事実はそんなことはなく、自閉することによって溜まる孤立のストレスは気分を落とさせ気を病むまでに繋がったりする。また急に外へ出て足を怪我したり腰ひざを痛めたり……と。適度にバランスを取り関係の中で動き回ることこそ、他ならぬ健康を維持する要諦なのだと改めて気付かせられる。

コロナウィルスがようやく下火になり、でもまだ冬に第六波が懸念される中、銀華文学賞選考会は、無事行われた。以下感想を述べておきたい。

「闘牛の絆」

ずばり、徳之島の闘牛の話。琉球王朝時代から五百年の歴史のある闘牛。主人公は技師と呼ばれ、還暦を過ぎた男。闘牛の場面が、実に臨場感を持って描かれ引き込まれる。

「ワッセ、ワッセ！」「ハイヤー、ハイヤー」の声が本当に聞こえてくる気がする。しかし、期待をかけた跡継ぎの息子が、台風により発生した土石流に呑み込まれ亡くなってしまふ。その悲しみを乗り越えて、今度は孫が勢子として立っていくことへの期待感で終わる。まさに闘牛に人生を掛けた男の生涯が、その臨場感抜群の舞台の上で見事に演じられた作品と言えよう。

「隻眼の熊」

前回「ラストオーダー」で優秀賞を獲た作者の小説。今回はグッと自然に近づいた内容となっている。

主人公はカールという二代目の狩猟犬を飼っている。しかし、主人公はヒグマを捕え倒すことより、何か神秘的な命への、ある種畏敬の念を持っている気がする。

〈突然、地響きを上げ、突進してきた。……ふと、熊の目に憎悪の色がないことに気づく。……目の奥に、刃とは違ふ、柔らかな光が見える。勇は、雨に打たれる十勝石のよ

うな目に、どうしても刃を浴びせることができなかつた。

……勇は思い出していた。なぜあのとき鉈を振り下ろさなかつたのか。……恐怖が畏怖へと変わった瞬間、自分も一頭の獣となつた。崇高なものを持ち砕こうとする人間の牙が、ひどく滑稽なものに思えた」と。盗伐の話とか、親を殺された子熊の飼育などもあるが、最後はその成長したヒグマと愛犬が闘つて共に死んでいく。その悲しみの中に、人為を超えた自然の命への思いが貫かれていた。

「エニシング・ゴーズ」私は今回、この作品を当選作の第一に推した。残念ながら、選考委員の価値基準の違いは如何ともしがたく、優秀賞という結果になつた。この作者は実によく書き続けてきた。その中で、発想の特異な作品群は、私にはそれほど響いてはこなかつた。前回のたしか「レンタルルーム」なども、発想としては面白いが、最後は架空のドタバタに終始した感があつた。

しかし、今回は違うと感じられた。女性主人公と半ば一心同体化した語りは、見事という以上に、その時代の息吹を活写しつつ、生きて流れている。……著名な左翼的評論家を父に持ち（それは主人公には人生の重い足枷のようなものだったのだが）、それから逃れ、歩み出すために三人の男を伝つていったのだ。一人は大学生の内田君、そのどこか弱弱しさとセックスの相手ということも含めて、主人公の心理的な安全地帯のような。そして十歳程年上のあまり

売っていないイラストレーター唐橋さん、彼らは主人公がバイトしていたスナック『エニシング・ゴーズ』の常連客だつた。……今の夫との別れに際し、そんな彼らとの交情を思い起こしつつ、まだ二十年くらいはあるだろう己の余生について思いを馳せる……まさに味わい深いジャズの名曲を聴いたような、人生というものへのスイングが残つた。

「目撃者」〈何十年も昔のごくささいな出来事が、じつは人生において決定的な意味をもつていたのだと解釈できる余裕を持てたのは、それなりに幸せなのかもしれない〉

そんな感懐ではじまる、ちよつと不思議な小説。母子家庭で、母親に期待を掛けられて育つた主人公は、中高一貫の私立の男子校に入る。そこにちよつと変わった転校生が入ってくる。

その高校の若い女教師に皆憧れを持っていたのだが、やがてその転校生と女教師がラブホテルから出てきたのを主人公が目撃する。一方、権威的で人望もあり（その女教師ともできていたと噂のあつた）男性教師は事故で他界する。ちよつとクラシックな「初恋」憧れ系の小説だが、大人の世界を垣間見せるように読者を引き込んでいく——その筆致がなかなかだ。そしてラストに打たれた。〈なにもかも消えてしまつたが、私だけはここにいて当時のことを記憶している。とりわけ生涯ただ一人の親友だつた彼が、星（女教師）と腕を組んで親しげに歩いていった夕暮れどき

の美しさは忘れ難い。……いまとなつてみれば、あれほどの詩は私の人生に二つと存在しないからだ」と。

「災禍の向こう」江戸末期に高祖父が興した老舗の酒造、主人公は五代目になる。しかし、ある日近くの川が決壊し、著しい被害を受ける。その水害から二ヶ月後、『亀の歩み、鶴の恩返し』というキャッチフレーズをつけて売り直す、しかし芳しくなかつた。

一方、主人公には、高校時代の野球仲間がいる。万年補欠だった主人公は最後の試合で、その友人が監督に進言してくれたことを思い出す（結局は受け入れられなかつたが）。そしてコロナの災禍に見舞われ、その気丈に思われていた友人は自死してしまふ。一方、それを乗り越えて主人公はまた、人生のバッターボックスに立つ決意を新たに

する。小説としてにかくストリートな主人公が光つた。「ウィルスと木偶廻し」徳島県のとある村に生まれ、九十歳になつた老婆の回想と孫との関り。その村に、かつて主人公が幼い頃、木偶廻しの親子がやってくる、その父親の方はひどい難病だつた。それでも家で彼らを迎えて上げ、その子の方（ヒデオ）が正式に家の子になつた。主人公はそのヒデオに、溺れかけた命を救われもする。しかし彼も当時の『流感』に罹つてあつてなく死んでしまふ。そのヒデオへの追想と、東京で一人暮らしをしながら、プロのシンガーソングライターをめざしている孫との関わり

……その構図の中で、(今のコロナと全く同じことだった。いわれなき差別やいじめが横行) していた当時の回想が読ませるものとなっている。

「無低の住人と少女」 脳梗塞を患い身寄りもなく、無低(無料低額宿泊所)にいる男。ある小柄な男から声を掛けられる。その胡麻塩頭の男の人生を聞いてやるうち、彼の娘夫婦は火災で焼け死に、一人娘が残っていたと、そしてその孫娘はある施設に入っていると聞かされる。そしてその三日後、小柄な老人は亡くなってしまふ。

仕方なく、その孫娘と接しているうち、男は何か変わっていく。一度も行くことのなかった病院へ行ったり、(ハステを捻出するため煙草をやめたら食欲が戻り三食とも食べ残すことがなくなった。加えて、暇を見つけて大学ノートに書き物をする。いつの間にか小説や詩ではなく童話を書くようになっていた)と。人生を諦めていた男が偶然の出逢いから、生きる意欲を取り戻していく過程が、リアリティを持って描かれている。

「一時帰宅」 入院している施設から老いた母親が戻ってくる。帰宅と言っても、二十六年間一人で住んで来た家にある。息子はそこへ行き、束の間の母息子の水入らずの生活が始まる。それが実に瑞々しく描かれている。この小説のクライマックスは、ご飯をよそうシーンである。

〈しゃもじ? そう、しゃもじ、ああ、ここにあったかね。

判官などが交流し合う人間模様の小説。

「三月十九日」 歯科医の父と息子の話。しかし息子は痛が全身に回っている……。その息子を看取るまでの経緯が臨場感をもって伝わってくる。

「たましずめ」 主人公は、教員だった女性の先輩に救われた過去があった。その女性が高齢になり、退院後主人公の家庭に同居させてもらいたいと言ってくる。彼女にも弟を死なせていた過去があった……。心理的に深いものは感じられるが、主人公も先生も暗いものを引きずったままで、小説としては読ませる支点が見つからない気がした。

「遙かな海」 戦前の沖縄地方の若衆共同体的話。主人公も、そしてその相手になる佳子もなかなか魅力的に描かれている。〈あのね、自由や平等というのも言葉じゃない。共同体も言葉の作品なのよ〉 そして時間論まででくる。

ラスト〈「そうよ。愛を創り出すのは感情ではなく、言葉なのよ」と。知的な面白さはなかなかと思われつつ、ちょっと思弁が優先し過ぎ、理屈っぽい感も否めなかった。

「共生花」 〈中学生の私は、母の自傷行為を目的当たりするのには、すでに慣れている〉 えっ、という感じで読んだ、ちょっと衝撃的な作品。しかし、最後までストーリーカーの中年男を母で惨殺してしまい、しかも平然と? している女子中学生の感覚はリアリティを感じられなかった。

「ヒバカリ」 大学を中退している主人公の青年と、歯科

……: 言いながら右手を伸ばして握ると、母は安心したのか大声を出した。しゃもじやと、妙な名前やねー、すっかり忘れちゃった。まっこと変な名前や。……: 和幸もつられて可笑しくなってきた。……: ついには二人して涙が滲むほど笑いの垣塙に嵌ってしまい、気が付くと鍋が焦げ付きそうだった) 生きている実感とは、心の底から共感できる相手がいること、人生の登りでも下りであつても、それが命の束の間の共有なのだ。それを見事に描いた秀作である。

「入学記念写真」 母子家庭で育った主人公。入りたくもないブラック企業に勤め、白アリ駆除の仕事で家を回る。そんな中、ある老女と知り合いになり、人間としての気持ちの交流をする。最後はすでに亡くなっている老女を弔いに、預かった猫と共に行くのだ。情の在処を見せてくれた作品。

「夫婦力」 子どもができず、離婚を決意した中年の夫婦。しかし過去の居住地を訪れ、知り合いの高齢の人に……: 世の中に何一つ変わらないものはないけれど、せめて夫婦の情愛だけは永遠であつて……: と諭され、離婚を思いとどまった話。

「D&Sの功罪」 この賞の第一回から、様々な形で力作を送って来られた作者。小学校卒業時に校庭に埋めたタイムカプセルを掘り出そうという話。主人公は医者、そこに地元の新聞社の女性や、列車の中で主人公が命を救った裁

医の若い叔母。主人公が知り合った女性奈津子の父親は、その叔母がパトロンで、しかもアトリエの火災で亡くなつてしまふ。最後は奈津子も菜園で凍死してしまふ……: ヒバカリというのは無毒な蛇だが噛まれると、その日ばかりということらしい。叔母がヒバカリに喩えられているのか……: 良く分からなかった。

「残照」 娘と二人暮らしをする父親の話。やり手の娘と、父親の再婚の話、まあほのぼのとした小説。

「ミルクレディ」 付き合った女性が「会食恐怖症」という病気を持つ女性だったという話。でも牛乳は飲めたのだ。最後は主人公の前で、ラーメンを全部食べてみせる。彼女の症状も克明に描かれてはいるが、何よりそれに寄り添い切った主人公が健気だ。

「光の射す方へ」 ハサミで人形を切り裂く趣味を持つている主人公を、「あなた」という人称で描いていく、特異な感覚の小説。異様な感覚がどうして生まれ、どうなっていくのか読み進めたが……: 良く分からなかった。

「ある再会」 高齢者施設に住む元教師の女性の所へ、教え子という女性が面会にやってくる。五十年ぶりの再会だったが、それは懐旧的なものではなく、その教え子か抱え続けてきたトラウマの吐露だった。でもそれは覚えのない出来事だった……: 。

「美女峠」 幼馴染の愛しい女子が貧しさゆえに売られて



選考会風景 2021.11.3 「サロン・ド・八賞」にて

行った話、主人公はその女性と、しかし再会できた。戦前の話だが、時代や情が良く描かれている。美女峠の清姫の話もそれにうまく呼応していた。

「権花の夢」老人が不思議に若返って、好きな女性を助ける武勇伝も描かれるが、結局元に戻ってしまう話。老いてなお、性的なエネルギーを回復し高齢青年として生きたという願望は良く描けている。

「ラダーバック」冴えない女をハントし、行為を撮影しそれを心の糧にしてきた男。(私は与えられた簡単な仕事を、満足にこなせないと評価されてきた人間だった。それが、課題を決めトレーニングや発声練習を続けることができた。これが、誰も知らない本来の私の姿だった。)そして(あの時、身体を中心に冷たい滴が流れ、それまでの人生で見たことのない灯りを見たことを思い出した。私が抱きしめたのは女というより愛おしい自分自身だった)と。異様な辺境の場での狩猟行為の中に人間の孤独な姿を映し出した秀作と思えた。

「silent love」道を挟んでそれぞれの仕事に励む男女が、やがて黙視し合う中で魅かれ合い言葉を発し合う瞬間までを描いた、ちよつと発想の面白い小説。

「ゲリマンダーの写真帳」(二つの町を含め学区に抱える中央小学校、卒業する児童が、三つの公立中学校に分かれて進学する。その進学先をめぐり、この二つの町は腸ねん

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博 ————— おおたか まさひろ
 1954 石川県生まれ 日大文学科卒
 80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
 他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

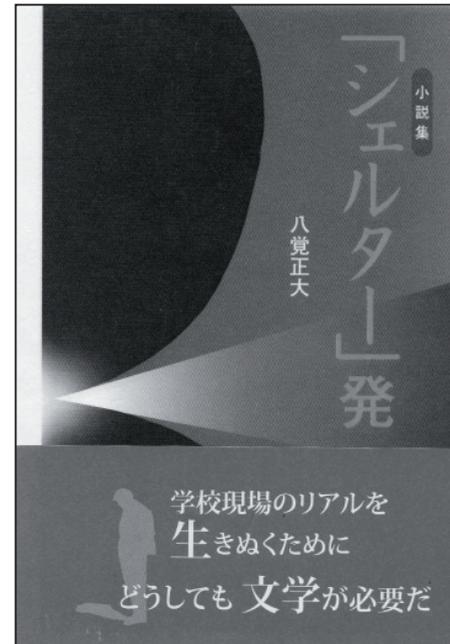
小浜清志 ————— こはま きよし
 1950 沖縄県生まれ
 劇団四季など様々な職を遍歴
 87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
 88「風の河」で文学界新人賞を受賞

八賞正大 ————— はっかく まさひろ
 1952 東京生まれ
 早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
 91「十二階」で新潮新人賞受賞 文藝学校・NHK 学園講師 主著『「シェルター」発』(けやき出版)『夜光の時計』(新読書社)詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』(共に洪水企画)

五十嵐勉 ————— いがらし つとむ
 1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
 79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
 84-90タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長 主著『緑の手紙』(インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ』『破壊者たち』

作家集団「塊」新メンバー募集中

連絡 090-8171-9771



けやき出版 1500円(税込)

転状態)にあった。それがタイトルの、アメリカのある政治区分の喩えに繋がるようだ。それがかつて好きだったのに忘れてしまい、その訃報に対応できなかった女子への主人公の気持ちに重なった……という小説らしい、しかし思いのルートとタイトルが少し乖離した感がある気がした。

「ついのすみか」九十五才の老女とその息子の視点を交互に入れ、養老施設に入るまでの経緯が克明に描いてある。「ドッグパドル」子どもの出来なかつた夫婦が思い余って子犬を飼う。その揚げ句溺れかけた犬を救おうとした夫は溺死し、犬は自力で生き延びる……。発想には魅かれたが読後感は少し虚しい。